

「聞」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

小春日の秩父に捜す腹出し子 長井 敦子

秩父吟行の折の一句。金子兜太の〈曼珠沙華どれも腹出し秩父の子〉(第一句集『少年』)を踏まえている。晩秋から冬へ繋がる小春日の秩父。大勢で兜太の生まれ育った皆野町を見て歩いたが、実際に腹を出している子が居たかどうか。皆野小学校は一時間目が始まっていて子等の姿は校庭に見えなかった。でも兜太を偲び「腹出し子」を捜したという作者。機知に富み、健気である。

銀翼の掠める埠頭鯊日和 中嶋きよし

羽田に近い埠頭か。「銀翼の掠める」は、飛行機が低空で頭すれすれに飛んで来る様子をうまく伝えている。そして「鯊日和」。その埠頭で鯊釣りをしている実景がこれもよく活写されている。竿を持って時折り空を見上げる作者の顔も見える。

味噌蔵の句会の机冬の蠅 中村 敬子

秩父吟行の二日目の句会は、秩父味噌ヤマブ醤油醸造元の新井武平商店の「味噌蔵ホール」で行なった。曾て

は兜太の父の伊昔紅が俳句を指導していた場所で、兜太死後に兜太を偲ぶ大きなイベントもここで開催されたという。そのホールを借りての句会だったが、実は冬の蠅も一匹参加していた。句会の初めから終りまで、追っ払っても机を離れようとしなかった。生真面目な蠅だった。その蠅を入れて纏めた記念の一句。

むささびとなりて見おろす友の家 中村 東子

川蟬俳句会で高尾山に登ったときの句である。八王子市内を俯瞰できる所から、句仲間の家らしきものが見え「何処?何処?」と参加者の声がざわめいたのである。その見下ろした自分自身を「むささびとなりて」と形容したのが如何にも高尾山らしく秀抜。薬王院へ行く手前の参道に三橋敏雄の句碑〈むささびや大きくなりし夜の山〉が建つていて作者も感銘を受けたのだろう。その「むささび」を借りて作った一句だが、そのようなことは関係なしにこの句は独立した句として立ち上がって来る。

新米を羽釜で炊けば菜もいらす 中村 幹子

羽釜はかまどでご飯を炊くための専用の鍋。底が厚く、丸みがあり、熱が均等に回りやすい。最近では高級炊飯器にもこの機能が採り入られている。「始めチョロチョロ、中パツパ、ジュウジュウ吹いたら火を引いて、

赤子泣くともふたとるな」の言葉の通り、甘さやうまみ、柔らかさなど美味しさの決め手は、水を十分に吸わせた米に強い火力で熱を加えることという。作者はその羽釜で新米を炊き「菜もいらす」と詠む。さもありなむ、むべなるかな。

朝寒や捨て水をして洗ひだす 野沢 慶子

捨て水は、給湯器からお湯が出るまでのまだ冷たい水。次第にお湯へと変わり、洗顔したり食器などを洗ったり。何を洗うかをこの句は細かく言わず「洗ひだす」としか言っていない。読者側に想像させるスペースをしつかり確保していて好ましい。言わずもなだが、「朝寒」は秋も末の頃の季語で「寒い朝」と使うと冬の季語になる。

秋の暮同じ箇処にて止むピアノ 橋本 恭子

毎日毎日ピアノの音が聞こえてくる。どの家から鳴っているかは解かっている、あの家だ。それも決まって秋の夕暮。しかも毎回、同じところで聞えてしまい音が止む。その繰返しを作者は面白く聞き想像を逞しくする。人にもよるが、出だして聞えてしまう人も居る。

朝の日や紅葉かつ散る壺春堂 長谷川菊男

この句も秩父吟行の折りの句。壺春堂は、兜太の父で

ある伊昔紅の診療所「壺春堂医院」であり、兜太の生家。今は兜太記念館として整備され、伊昔紅・兜太二代に關わる展示物を見ることが出来る。中村草田男が惠贈した『萬緑』創刊号も在った。初めて訪れた作者ももちろん拝観し周囲を歩いたことだろう。「紅葉かつ散る」はその日その時の囁目。朝の日が差し、眩しかった。

「あの富士は雪で出来てる」と言ひ張る 長谷部幸子

科学的根拠は無いけれど、雪で出来ていると言われれば、そうかなあと思う。小さなお子さんの口から出てきた言葉なのだろうが面白い。靈峰富士も苦笑していることだろう。「言ひ張る」で情景が広がった。

どんぐりを拾ふたんびに見せる児よ 浜田 優子

この句も幼子を詠む。団栗が珍しくて嬉しくて、拾うたびに「ねえねえ、見て見て！」と目を輝かせ団栗を見せる。この句「拾ふたび」でなく「拾ふたんび」が素晴らしい。幼子の気持に寄り添った優しい言葉。

山々は湖面に紅葉急ぎけり 原田ミチ子

山の紅葉の彩りが一挙に加速する。それは湖面にも及び、一層の感がある。「急ぎけり」の潔い切れがそう思わせるのかも知れない。景の構成が巧みな句である。

うらうらと熟柿の重さ齢積む 春田 千歳

熟柿のずっしりとした重さが人生の重さに繋がっているのだろう。それを「齢積む」と表現した。句全体が重く流れならぬよう「うらうらと」で中和しているところが流石である。阿久悠の歌詞の一節に「ウララウララウラウラウ」があるけれど、そういう陽気さが加味され作者の人生はこれからであることが暗示されている。

咳きこみて距離を置かれて一人かな 平野 豊雄

新型コロナウイルスの感染が三年にも及び、日本では未だにマスクが手放せない。敏感な我々は電車の中の会話にも注意を払い、くしゃみや咳が出そうな時には口を手で覆う。しかし、喘息などの持病を持つてゐる方はそうもいかず咳き込み、コロナでもないのに衆目の的となる。この句の「咳きこみて距離を置かれて」はまさにその状況を伝えていて、下五「一人かな」が哀しい。

猿の腰掛詩の神様の降り立てよ 福井 芳野

詩の神様が降りて来そうなのは色々あると思われろのに、作者はよりによつて「猿の腰掛」を選んだ。樹木に寄生する害菌にも拘らずこんなユーモラスな名を付けられた猿の腰掛。腰掛けた途端に詩心が湧くような存在だが、「降り立てよ」と祈ればもつと効果があるのかも。

つがるてふかなのやさしき林檎選る 本多 遊子

「津軽」というと『津軽じょんがら節』。雪解けのあと越後誓女が旅回りし誓女歌を歌った。津軽の荒波を背に三味線の厳しい音が鳴り響く。その「津軽」という漢字を捨て「つがる」の名を持つ林檎。漢字とひらがなの違いだけが「つがる」の方が確かに優しく感じる。かつて「津軽娘は泣いたとき」と空想ひばりが歌った津軽のイメージは払拭され、明日への希望に繋がる「つがる」の誕生。その明るさが作者の今の心に添ったのだろう。

教会にバリトンのこゑ冬の波 松本 余一

作品「長崎」の中の一句。禁教時代の隠れ切支丹を訪ねての旅だったのだろうか、他に〈遮るもの無き殉教の丘の冬〉〈冬の潮洗ふ孤島の教会堂〉等の句がある。この句では教会内での祈りの声が色濃く描かれていて殊に「バリトンのこゑ」が印象的。そのバリトンと冬の波との取合せからは、檀徒衆の深い祈りが感じられる。

泰然と兜太の句碑や銀杏散る 水谷 光子

「泰然と」に納得。今回の秩父吟行で巡った金子兜太の句碑は〈山峡に沢蟹の華微かなり〉〈夏の山国母いて我を与太という〉〈おおかみを龍神と呼ぶ山の民〉〈裏口に線路が見える蚕飼かな〉〈僧といて柿の実と白鳥の話〉

〈おおかみに螢が一つ付いていた〉へよく眠る夢の枯野が青むまで。何れも兜太特有の骨太の字で句が掘られている。威風堂々、泰然と聳えている趣があつて、それは肉弾ともいふべき兜太の肉体の化身のようにも思えた。

ひさびさに背広着る夫文化の日 持田きよえ

退職は老後の始まり。スーツや背広とは縁が無くなる暮しが訪れ、私ごとで言うと、魂が抜けたような縮まりの無い腑抜けな顔、肉体になる。動作は緩慢、物忘れも頻繁に起き我ながら情けなくなる。それがどうだろう、何かの機会に背広を着たら、あら不思議、生き生きとした振舞い、昔とまではいかないが少しは精悍な顔付きになる。掲出句では、文化の日という栄えある祝日を得、久々の背広に腕を通す「夫」が健康的に描かれている。作者の安堵した微笑ましい顔が句の背景に窺える。

石灰岩積みヲキフ過ぐ枯葎 森尻 禮子

「ヲキフ」は鋳石運搬用の秩父鉄道ヲキフ形貨車をいう。現在は太平洋セメントの私有貨車で石灰石を積む。作者は貨車の腹に白く「ヲキフ」と書かれている車輛を見つけ、そこから詩心を得たようだ。線路の手前の金網に枯葎が絡みつき、何か殺伐たる秩父の吟行句。「ヲキフ」の発見がこの作品の全てである。

電線にからむつる草秋夕焼 八尋 信子

見上げた電線に蔓草が絡み、垂れている。そこだけを見れば殺風景だが、その電線辺りまで広がる秋夕焼が圧倒的に美しく心が救われる。作者の胸中を秋の夕焼が染める。この句、蔓草の発見と「からむ」という把握が良かった。

暈替へ野にゐることく香りけり 山田 雅子

新年を迎えるその用意に、新しい暈に変えたり、裏返したりする暈替。その表の蘭草の香りを作者は詠む。「野にゐることく」は最上の比喻であり最良の措辞である。新しい暈での香ばしい暮し。

千人針知らぬ幸せ針供養 横須賀智子

千人針は日清・日露戦争の頃に始まったという。出征兵士の武運長久を祈るために千人の女性が一片の布に赤糸で一針ずつ縫った。お呪いである。先の戦争でももちろん行われ、多くの若い人たちが戦地に征かされ尊い命を失った。この句の作者はそのような経験はなく、「知らぬ幸せ」と詠む。針供養に持参する針が戦争と関わりのない針であつて欲しいとの願いに共鳴した。針供養は針を使うのを忌み慎む日。関東では二月八日、関西・九州では十二月八日に行われる。針納め、針祭る。

切株を巻いて紅葉のネックレス 東 祥子

見立ての句。 蔦紅葉の類なのだろうか、それが切株の周辺までに伸び、あたかもネックレスのように取り巻く。切株が美しい女性の首のようで、紅葉のネックレスを巻いてとても高貴に見える。句の焦点が一つに絞られる印象鮮明。

着ぶくれて次はどうするセルフレジ 伊澤やすゑ

スーパーなどでセルフレジが進んでいる。従業員を置かず、買った野菜や肉や惣菜、洗剤などは客が自らセルフレジの機械で、今まで従業員が行なっていたようにバーコードを読ませ精算するのである。最後に代金を機械に入れて終了するが、この方法が高齢者には厄介。機械の指示によって操作しても何が何だか解らない。増してや着ぶくれて動作が緩慢になっている。まさに「次はどうする」だ。どうするどうする貴女なら。怒りの一句。

裸木の大きな立志骨太し 市村 啓子

葉を散らし尽した大樹。裸木となり寂しくもあるが、高く見上げると何か堂々としていて、この句の「骨太し」は素直な実感である。桜の木にはもう冬の芽が出、そこに作者は大きな立志を感じた。厳しい冬に耐えるその姿に心を打たれたのであろう。

色鳥や林は金の夕日抱き 岩根 甲

美しい彩の句。色鳥は秋に渡つて来るもろもろの小鳥をいい、その色彩の美しさが特徴。その彩に対してこの句は「金の夕日」を挿入し、輝きを倍加させた。しかもこの金の夕日を林が抱えているという構図を作ることで色鳥の眩しいばかりの登場を促している。その構成力が巧みである。

石焼芋抱きすべてを許しをり 牛込はる子

「すべてを許し」の解釈を読者に想像させる一句。「石焼芋抱き」にその回答はない。何か気になる句である。石田波郷の〈金雀枝や基督に抱かると思へ〉を直ぐに思つた。金雀枝は「一種の付合」だと波郷は自解しているが、掲出の句も石焼芋は取合せて用いている。そう思われてもいい句である。波郷の句を読むと、この石焼芋がキリストに思えて来るから不思議。

空風や洗濯物の舞踏会 内海 範子

空つ風で洗濯物がくるくる舞っている。それを舞踏会と把握したのは手柄。洗濯してそれを干す。普通はやれやれと思うところを、作者はそこに舞踏会を思い描いた。心の余裕が感じられる。映画の『舞踏会の手帖』や『風と共に去りぬ』の舞踏場面が思い出された。

養生に魚肉がよろしおでん鍋 大下 壽櫻

おでん屋さんには、玉子、豆腐、章魚、中着、半平、榎茸、蒟蒻、雁擬、海老芋、葱鮎、聖護院大根、玉蜀黍、春菊、湯葉、蒟、鰯団子、南瓜、焼売、竹輪、ロールキャベツ、ウインナ等のおでん種があるが、紀文食品によると、家庭で使われているおでん種は全国で824個もあるという。この内、章魚、葱鮎、鰯団子は魚肉。掲出句の「魚肉がよろし」に適った海鮮おでんで、体が温まり、確かに養生に良さそうだ。

もみぢしてしづかに力抜く草木 太田 裕子

草もみぢ、雑木もみぢ。身の内の魂というかパワーとどうか、その情熱が紅や黄の色をもって噴き出し、色を尽くす。この句はその逆つたあとの草木を「しづかに力抜く」と詠む。もみぢした後は枯れていくが、それを「枯れにけり」とか「あはれなり」と詠むのは簡単。力を出し切つて、ふつと安堵の息をつく。そこを作者は「力抜く」と洞察した。

兄老いて亡母丹精の柿たわわ 小河原政子

採られないままの庭の柿の実。それは亡き母が丹精を込めて育てたもの。兄がそれを引き継いだもの今では老いて採ることも叶わない。肉親を詠む句はとかく思い

出が交錯し甘くなりがち。でもこの句は焦点がはつきりしており、作者の哀しさ淋しさがよく伝わって来る。

金秋や兜太の郷は味噌匂ふ 金子かほる

味噌蔵ホールで句会を開催したからでもないだろうが秩父は味噌が匂う。吟行で立ち寄ったヤマブ新井武平商店の売店には、黄金味噌、田舎味噌、米こうじ味噌、米味噌をはじめ、さばの味噌煮、ぶた肉みそ漬のレトルトや味噌ドレッシング、ねぎみそ煎餅、揚げみそ煎餅などが並ぶ。しかし、だから「味噌匂ふ」ではない。兜太の肉体から迸る味噌の香を作者は嗅ぎ取つたのだ。兜太の詠んだ遺句〈陽に柔わら歩ききれない遠い家〉の「遠い家」は秩父・皆野町の実家だといわれている。秩父の骨太な風土が味噌を生み、兜太を育てた。そのように解釈しても失礼にはならないだろう。

想ふまま生きて熱爛レバの串 金子 学

自由奔放に我が道を往くを貫いてきた、その来し方を詠む。熱爛と焼鳥のレバーを愛してきたが、今は病を得て酒が飲めなくなっているのかも知れない。晩年の志ん生。家族が健康を慮り水で薄めた酒を志ん生に飲ませた。そんなことに気付かず酒屋の御用聞きに「近頃やけに薄いじゃないか」と。兎に角、お元気にお過ごし下さい。

姉と行くふるさとの墓石路の花 金田 知子

故郷に行つて墓に手を合わせてきたという報告句だが句の形が良い。したがつてリズムが滑らかですう一つと読むことが出来る。また、姉と二人で墓参したということから親御さんの命日に帰郷したということが何となく判る。傍に咲く石路の黄が輝いていたことでしょう。

からからと風に追はるる落葉かな 金田 喜子

たくさんの落葉に目が留まつた作者。その落葉を風が追う。追われた落葉は風に身を委ね、後退りしながら転がつてゆく。それは一枚ではない、何枚も何枚も転がつてゆく。空気が乾燥しているので落葉もからから。そのからからがそのまま音になつて作者の耳に入る。落葉を愛おしく感じなければこの句は生れなかつただろう。

ドア開けて石焼き蒔の香を呼びぬ 菊地 孝枝

ドアでも窓でもいい。屋台の石焼き蒔を売る声が近くまで聞こえてきたので、ちよつと開けてみたのである。風向きがよろしく、隙間から焼蒔の匂いが入つてきた。普段なら子どもを使いによつてその焼蒔を買わせるところだが生憎子どもが遊びに出かけていて居ない。ドアを暫し開けたままにして、その香りを楽しむ作者。そのように想像してみた。何とも言えぬ石焼き蒔の良き香り。

糶殻から孫の数だけ寒卵 北 好夫

曾ては病氣見舞いに糶殻に詰めた卵の箱を持参したという。掲出句の卵はそうではなく、にわとり小屋の卵なのかも知れない。壊れないよう糶殻の上に卵が置かれてゐる。それを今朝食べる分だけ取りに行つたのだろう、それも孫の数だけ。寒卵は滋養に良いとされている。また卵自体も、殻の白と黄身の黄の取合せは古来目出度いとされている。お孫さん達は幸せである。

光年の星にもみぢのふりしきる 久保田勝一

壮大なロマンを駆り立てるような句。紅葉が散つてそれが宙を飛んで行き、光年先の星々に降りしきる。加藤楸邨の〈天の川わたるお多福豆一列〉を想い出した。久保田さんの句では「ふりしきる」の力強さが一句の格調を高くしている。言い切つた「切れ」の良さ。

兜太の碑釣瓶落しの日矢射抜く 栗原 季星

早くも沈まんとする夕日。それが木洩れ日となり雲間からの日矢ともなつて、兜太の句碑を射抜く。この「射貫く」という措辞が大人巨人の兜太と堂々互角の勝負をしているようで秀逸。秩父にお住まいの栗原さんならではの目配りの効いた一句と思う。

天狼に笑はれるかも地球の愚 小坏あゆみ

地球が愚かなのではなく、人類が愚かなのである。しかし他の星から見たら、そういう人類を置いている地球が愚かだと笑うだろう。自然を破壊し生命を軽んじ戦争に明け暮れる人類。神はなぜ人類に二足歩行を与えたのか。なぜ脳の発達を促したのか。なぜ火の使い方を教えたのか。シリウスの星が問うている。

黄落ヤスカーレットの燃ゆる恋 小泉まり子

マーガレット・ミッチェルの小説『風と共に去りぬ』。映画ではビビアン・リー、クラーク・ゲイブル、オリビア・デ・ハビランドなど。南北戦争を背景にした大河ドラマで、マックス・スタイナーの「タラのテーマ」が冒頭のタイトルから大きく轟いた。オハラ家の大樹のシルエットの美しかったこと。スカーレット・オハラの失恋と結婚、破綻。それでも希望を持ち「明日は明日の風が吹くわ」のような科白もあつて、観客を魅了した。作者もその一人だったのである。この映画、情熱的な場面のドレスには燃えるような赤が用いられた。

行く年へアディオスそしてグラシアス 幸喜美恵子

一年が終るときの、その一年への感謝の言葉。スペイン語でアディオスはさよなら、グラシアスはありがとう

う。その二つの言葉だけでこの句は成り立っていて大変面白い。何かを描写するという句ではなく、自分の今の気持ちをもそのままの言葉で綴った一句。日本語でなくスペイン語を使ったのが格好いい。「そして」も効果的。

氷嚢のごとき 一皮柿熟す 小濱けえ子

熟柿の薄い皮と、その皮の感触を「氷嚢のごとき」と比喩し表現し得た手腕。手に触れたときに冷やっとしたのだろう。熟せば熟すほど冷えてくるのかも知れない。熱のあるおでこに下げた、昔懐かしい氷嚢がこういう所に使われようとは。

冬星座バックハグからプロポーズ 小林ゆきお

十二月の例会で埼玉句会を卒業された小林さんの句。男性は小林さんと栗原さん、大塚さんと私の四人で、私はバックハグはもとよりハグは苦手だし、ハグすると肘鉄を食らいそうなタイプ。私の句ではないと直ぐ判った。まさか最長老で紳士の小林さんの句とは、と感嘆した。作者は現代の社会現象や世俗に敏感な方。若々しい言葉を躊躇いもなく用い、しかも作者であれば今でもこういうプロポーズが可能と誰にでも思わせるほどに一句を構成した。句の内容と作者名が一体となった作品。冬の星座の下、若返った二人の白息がかすかに見える。

あゝこれがガランスの朱寒夕焼 小林 玲

フランス語のガランスは茜色。少しくすんだ赤色で、遠富士の辺りに佇み沈む寒夕焼はこういう色をしている。その色を見ての作者の「あゝこれが」の驚きは、ガランスへの憧れから来ているのだらう。例えば、エルメスのバックの「ルーージュガランス」という色が念頭であり、寒夕焼からエルメスのガランスを想ったのである、深読みをするならば。素敵な茜色である。

凍蝶の終の止まり処 力石 斉藤久美子

寒々として動かない冬蝶、凍蝶。偶然ながら力石に留まっている蝶を発見した作者には、力石が凍蝶の安息の場であるように思われた。「終の止まり処」をそのように理解した。三十貫、四十貫ある力石に秘められたパワーが凍蝶の命を蘇らせても可笑しくはない。

自転車に油を注して十二月 佐藤 和子

自転車のチェーンなど所要所に油を注して車輪の回転を滑らかにする。年用意でもないのだろうか、一年中自転車の世話になつていふのだから、年の終りの十二月ぐらいには一度油を注してやる。それが愛情というものの。「十二月」に納得した。人間もがたが来たら油を注さなければいけない。俳句が油だったらいいのに。

晩学の道はあるもの 大花野 島 昌子

晩学の道は一途。来し方をもう振り返らず、信ずるところへ歩を進める。でも、進むべき道はなかなか遠く、方向も定まらない。その作者がとうとう道を見つけたという。それは大花野に至る道。現実の大花野ではあるがこの句で大花野は一つの象徴として用いられており、悟った先にある無我の境地を指しているようにも思える。大きな句だ。「道はあるもの」に達成感がある。

バンクシー画の剥がされし街雪が降る 清水 悠太

路上芸術家、芸術テロリストとも言われている正体不明のアーティスト、バンクシー。その作品の描かれたウクライナの首都キーウの近郊にある建物（ロシア軍に破壊されたとみられる建物）の壁が昨年十二月、男女八人によつて剥ぎ取られた。犯人はその場で警察が拘束。「売却して利益をウクライナ軍に寄付したかった」と話しているというのが真意は解らない。作品に損傷はなかった。掲出句はその事件を扱っている。ロシア軍による軍事侵攻が無ければ起こらなかつた窃盗であることへの怒り。「雪が降る」が遣る瀨ない気持ちを代弁している。

腹めぐり鯛焼食らふおばあちゃん 新海あぐり

鯛焼の腹を「めぐり」というのが強烈で、えぐい。頭

から食べる、尾から食べるという在り来りの次元を超え、両手の親指でおもむろに腹を押さえて抉る。この「ゑぐる」の意味の一つとして広辞苑では「通り一ぺんのことではすまず、独特のやり方をして人の意表に出る」と解説している。お上品さを嫌うこのようなお婆さんほどの町にも居そうで、居なければ世の中つまらない。中村草田男は「写生は角度」と言ったが、この作者の人間を見つめる角度は鋭く、人間描写がユニーク。

油絵のごときを連ね山装ふ 菅原 淑子

山粧うは秋の山。紅葉や黄葉の彩りのある山である。普通は「装う山は絵の如し」と詠むところだが、この句の比喩は倒置している。油絵のごときものが秋の山なのである。そして何よりも、水彩画でなく油絵であるという点。油絵の顔料を重ねた色、光沢を持った色こそが作者の「山装ふ」。この句は「連ね」を加えたことで景の美しさが広がった。

月の辺を飛行機西へ東へと 杉淵真喜子

旅客機だけではないのだろうが、飛行機は毎日忙しい。飛行機雲が交錯している空を見るにつけそう思う。この句はその飛行機たちが丁度、月の周辺を飛んでいる様を詠む。機内に居る乗客に月はどのように映っているのか。

お月見専用旅客機のようなものが在れば乗りたいものだ。機内食には月見団子、衣被、栗きんとんなどが出て、果物は葡萄、柿、梨。希望者には御神酒も振る舞われる。

虫の声しづめの雨となりけり 鈴木 智子

「しづめ」は鎮め。俄かに降ってきた雨が虫の声を鎮め抑えたのだ。それだけのことだが句の形が実にいい。「しづめの雨となりけり」の詠嘆で余韻も生まれ、格調高い句となった。

仕舞ふときちりんと鳴りて秋風鈴 鈴木 藤子

夏の間じゅう下げていた風鈴を秋のとある日に仕舞う。その最後の音色をこの句は詠んでいる。風鈴の心地よい音をもう聞けないと思っていたら、仕舞う寸前に「ちりん」と風に揺れて鳴った。一瞬の音色だけに作者の心に残ったのだろう。秋風も身に沁みだ。

日向ぼこ軍歌が子守唄でした 高橋 章子

若い人の句なので、これはどなたか日向ぼこをしているご老人から伺った話だろう。「軍艦マーチ」「加藤隼戦闘隊」「月月火水木金金」「予科練の歌」などの軍歌が巷に繰り返し繰り返し流れた。戦前のことだが、うかうかしていると明日は我が身。子守唄にならないように。

やはらかき土にやさしき初時雨 高橋満利子

やはらかきの「や」と「き」、やさしきの「や」と「き」がそれぞれ韻を踏んでいる。言葉の一つ一つの響き、美しさを大切にしているのがよく解る。初時雨の「初」は時雨への誉め言葉。仄々と心に沁みてくる句である。

フライパンを目覚めさす音寒卵 高橋美智子

割り落とした卵をフライパンに入れたのだろう。フライパンの肌に油をなじませて、いよいよ卵料理を作ろうというところ。卵がフライパンに入った瞬間の音、それが「フライパンを目覚めさす音」か。揺すられて、返されて、その後のフライパンは目が回るようだ。卵は寒中に産まれた寒卵。栄養満点のオムレツが出来そう。

この人には土偶の切手文化の日 竹森 美喜

切手は季節によって色々なものが販売されている。手紙を書く人にとっては好みの切手を買うのが楽しみでもあり、何種類かあるものをシートで求めることが多い。差し出す相手が顔見知りであれば、その人の好みに合った切手、その人らしい切手を選んで貼るのも楽しみである。俳句の好きな人には「奥の細道シリーズ」。花の好きな人には「自然の記録シリーズ」と。掲出の句では土偶の切手を或る方を選ぶようとしている。縄文時代の芸術

や考古学、発掘に興味のある方かもしれない。その方に合った切手を選ぶというのは一種の心遣いであり、ささやかな贈り物であるのだろう。切手を選ぶ心こそが「文化の日」に相応しく思われる。

身に入むや初めて兄の弱音聞く 田中 京

偉丈夫だった兄。大きな声で皆を鼓舞しいつも親族の中心にいた兄。これまで一度も弱音を吐いたことがなかったその兄が遂に弱音を吐いたと、この句は綴る。「身に入むや」が事の重大さを物語っている。

冬が来る山のふもとへ斜交ひに 寺田 幸子

「冬が来る」は「冬来る」「冬立つ」と同様、「立冬」のことである。冬を擬人化した言葉で、この句では「山のふもとへ斜交ひに」やって来たかと詠む。冬が斜交ひに？その問いから先ず初冬の日差しを想った。冬の弱い日差しが山の麓に低く届いたのだ。ならば「冬日差山のふもとへ斜交ひに」でいいのだが、これでは解かり過ぎてつまらない。作者も満足しなかつた筈である、日差しだけでなく、木枯しも雪も吹く冬という言葉わば暗黒の世界、死の世界、そういう大きな塊を作者は詠みたかったのではないか。大胆な表現だと思ふ。里人の視点を持つ一句。(忍びよることなく冬の来りけり 相生垣瓜人)。